寄書

横濱の水彩畫展覽會を見る

絹糸のような秋雨の降る十七日の午後、昨日から老松小學校に開催された日本水彩畫展覽會を見に行つた、先づ足を第一室に入れると、其處は支部會員と大下講師の作品が皆で七十四點列べて有る、づうつと見た處田中太郎吉君の作品が一番佳作で『豐顯寺の森』や『山手居留地』などは中での佳作だが、後者の手前のドブ石は石の感じがないと思ふ、『御嶽の秋』は氣持の善い畫、『秋の暮』も面白かつた、高畠君の『甲州駒ケ岳』は非常に善い作だ、『釜無川』も善かつたが山が少し重く見えた、保田君の『初秋』は面白く、『奈良の雨』は柔かい筆で、輕部君の作品には熱心に研究した跡が見えた、『小川』が善かつた、鷹野さい子君の『朝顔』は一寸面白く、平野君のでは『久保澤の秋』が善い、跡のは皆餘りぞんさいだ、聞けば未だ初めてだ相だが、上手な人達の達筆を初歩なのに眞似するのは餘り善くない、あく迄で忠實に描いたのが爲になると思ふ、小林君の『靜物』は善いが『仲秋』は餘り好ましくない、形も不充分だし色も不快だ、全體描法が善くないと思つた、佐羽君の驛路は面白い作だが道が餘り平たくて板の樣で有つた、大下講師の出品は二十一點の多數で、皆々熱心な寫生畫許りて後進者の參考に成つた。

第二室に入ると、其處は東京研究生出品と參考品が數枚有つた、奥村博君のお茶の水は小品で有つたが善かつた、八木君の『富士』はキレイに遠近が取れて描いて有つた、赤城君のでは『箱根』はスケッチだが中々達筆で有つた、相田君の『能面』には實に驚いた、前の白い面なんか木を刻して出來て居る感じが申分なく出て居た、無暗に圖許りよつて描くより、此樣なものを描いて其物質を出す可く研究したが善いと思つた、『檜原湖』善く色が出て居たが舟はなくもがなとの評判で有つた、水野君の『町はずれ』は町はずれの感じが善く出て居た、水野君は好んで此樣な場所を描く樣だが、それが又非常に善く感じが出る、寺田君の『冬の午後の日影』は氣持の善い畫だ、手前のシメツた河原は暗くて杭の半分に日がパット當つた處と橋の影が取わけ善かつた、『隆慶橋』はより以上の佳作と思ふ、風が吹いては小波が立つた感じなんが實に善く出て居た。參考品中の中川氏の『入間川秋の夕』は、ポット霞んで遠くに白い煙りが二ツ三ツ登る善い畫だつた、茨木氏の『古驛』は面白い描法、初めて見る時は驚くが善々見て居ると面白味が出てくる、中澤氏の木曾寂覺の床』は、月影で柔い畫だ、河合氏の裏街道は淋びしい色でをちついた畫だ、また丸山氏作品は多く大作で有つたが、唯きれいキレイと思つたのみで外になにも頭に殘らなかつた、最後に故淺井忠氏の『カレイ村』(佛蘭西の秋)を見て實に其描法の善い密な色の善い暖かい好い畫であの位いに研究しなければ駄目だなと唯々敬服の外はなかつた。

夕暮近く會場を出て、追々考へた、新らしい頭で新らしい描法を用いて進んで行く若い青年畫家の前途は希望に滿ちてる、

其の勇ましい進歩を見て、今の所謂大家連中も大家の名に安んぜずして『なに若い者なんかに敗けるものかと云ふ位いに、うんとヘビーを出して奮つて研究して貰いたい』と思つた。霞生

畫趣に富みたる淺間社

在清水　清茂生

靜岡市へは清水港より、鐵路十錢行程三里です。市の風致は駿府城趾、安倍川、及び淺間社です。けれども其隨一は、淺間社でせう。日光を見ざれば、結構といはれずといゝますけれど僕は實際見て、却て失望しました、これは人々のいゝふらしのえらい割合に、社殿も狹小に、且つ色もあまり、華麗ではなかつたからです。

僕は、今迄參拜した社の中で、此社ぐらい、何かと畫味の調ふて居るものは、先づないです。第一心地よいのは、境内の狹くるしくないことです。老樹の多いことです。背後に古杉欝蒼たる山を負ふて居ることです。第二に社殿の壯大なことです、建築物の數の多いことです。第三に社殿の丹精其他が、古雅蒼然たることです。一たび足を此地に入るれば、神韻先づ人を襲ひます。

社は今より一千餘年前、聖武帝の御宇の創立とやらです。今の社殿は、德川中葉以后の建立です。社格は國幣中社、三面繞らすに、青苔紫蘚斑々たる、石の玉垣を以てします。他の一面は、即ち森々たる山なのです。先づ石の大鳥居を入ると、石造下馬橋があります。それを渡つて、丹塗銅瓦の二王門（維新の際二王だけは佛なればとて他へ移されました）があります。それから敷石の上を通つて行くと、群鳩の羽音高く飛び交ふのを見ます。さて前方には、長き廻廊がありまして、風雨にさらされたる瓦の色面白く、欄間に掲げられた奉額の色亦愛すべしです。中央なる朱色二層の樓門をくぐりますと、今度は稚子殿です。これは白木造りですが、しかし今は中々雅色豐です。拜殿は十三間の丸柱、殿宇高く蒼穹に聳え、形態色調亦頗る佳です本社は數十階の石段上にありまして、彫刻等美麗精致なものです。

此外又、俗に百段と申します百の石段を杉樹の影を踏みつゝ登りますと、こゝは眺望頗る佳、近隣郊野一眸の下に集りますこゝにも亦、丹塗の一社があります。此外大歳御祖の神曰く何曰く何と、重要建築物の數が、總てゞ十棟程あります。何しろ德川家指揮の下に出來たものですから、たしかにけち臭くないのです、そして又、久能山以上です。

僕此夏五日間此社に寫生いたしました。當地山本氏は、極めて熱心なる寫生家ですが、淺間に關する寫生、百點以上はされたといふことです。此一事でも、いかに畫趣に富めるかが推測できます。諸君或は來岡の機を得給はば、一たびはこゝに、彩管を洗ひ給へ。

＊　＊　＊　＊